

新岡垣風土記

第421回

失われた岡垣の農村風景

―トウシヤクのある田んぼ―

岡垣歴史文化研究会 石田 健次



▲稲藁を積み上げた「トウシヤク」



▲稲を乾燥させるための「シンコウヅミ」

写真は、昭和四十年代
初頭の山田区の田んぼの

風景を撮影したものである。このよ
うな風景は岡垣のどの地域でも見
られた。

円錐形に見えるのが「トウシヤ
ク」で、稲藁を積み上げたもので
ある。高いものになると大人の背
丈以上の高さのものもあった。

トウシヤクは、「**稲積**」の音読と
いわれており、
日本全国で見ら
れたものである。
その呼称は多様
で、トウシヤク
と呼ぶ地域は限
られる。
刈り取った稲
は、脱穀するま
でに乾燥させる
必要があった。
写真後方に見え
るのは稲を乾燥
させるもので、
「かけいね」また
は「かけばし」と
呼ばれた。架け

干しは江戸時代には既に推奨され
ていた方法であったが、架け干し
が普及するまでは、刈り取った稲
を田んぼの地面で乾燥する地干の
方法が長く行われていた。また、
下の写真は「シンコウヅミ」で稲を
交互に積み上げて乾燥させる方法
である。

乾燥を終え、脱穀した後には大
量の稲藁が残る。この稲藁を貯蔵
するために考えられた技術がトウ
シヤクである。

稲藁を円筒形に積み上げて頂部に
藁束の屋根をかぶせたものである。

稲藁は、農家にとつては貴重
な資源であり、たい肥・飼料・
藁縄・筵などに利用された。この
ため、稲屋といわれる農業倉庫で
貯蔵することもあったが、大量の
稲藁を貯蔵する方法としてトウ
シヤクが取り入れられた。

このトウシヤクも、農業の機械
化により、コンバインでの収穫が
普及したことや稲藁そのものを利
用することが少なくなり、次第に
姿を消していった。